

評論

なぜ看図アプローチなのか —協同学習ツールとしての意味—

田中伸子¹⁾

キーワード：看図アプローチ・授業づくり・協同学習・同僚性

看図アプローチで脳にスイッチが入る

筆者には、板書して振り向くたびに海の潮が引くが如く、風で倒れた稲穂のように学生が眠ってしまった授業の思い出がある。今から20年以上前、看護教員になって3年目のことだ。例年なかなか学生がのってこない内容の授業だったので、資料を徹夜で準備した結果だ。わかりやすく教えるつもりで、見ればわかる資料を作ったら、学生は静かに眠ってしまった。そんなはずはないのだが、今も夕陽に照らされた稲穂のように黄金色に輝く思い出である。残念でもあり、スタートラインに立ったようなすがすがしさもある思い出だ。

2017年のある日、看図アプローチのセミナーに参加した二人の教員が、教員室の机が離れているにもかかわらず各々の机から大声で授業作りについて会話を始めたので、教員室はにわかに騒がしくなり、他の教員も興味を持たざるをえないという状況になった。二人のセミナー報告書には、「脳にスイッチが入る」という共通の言葉が記載されていた。脳にスイッチが入るといのはどのような体験か？どこにあるどんなスイッチか？様々な疑問と興味が湧いてきた。スイッチが入ると起こる変化に期待して始まった、九州の小さな看護学校の教員全員で授業をつくる取り組みについて紹介したい。

見えるものから見えない世界へ

セミナーを受講した教員が成人学習者として速効性のある内発的動機づけをもったことをきっかけに、鹿内信善先生のワークショップを7月に教員全員で受講する機会を得た。なぜ教員全員でなければならなかったのか。それは個人技にしないため、看図アプローチという汎用性の高いツールが特定の人に属してしまう危険性を防止するためである。協同学習ツールの属人化を避け、教員全員の共有財産として、その価値に気づくために10月にさらに2日間の鹿内信善先生のワークショップを受講した。2019年8月には第10回目の看図アプローチ研究会を迎えることになった。なぜ10回続いたかは後で述べることにして、この10回目の看図アプローチ研究会は、鹿内先生の「10回目の看図アプローチ研究会にはまた来るからね」の言葉どおり、全国看図アプローチ研究会の第2回研究会と同時開催となった。この全国看図アプローチ研究会では食をテーマにした看図アプローチを使った大学院の学生による90分間の授業が展開された。この授業はみる、話す、聴くはもちろんのこと、食べたり、嗅いだり、音を聞いたり、触ったり、五感を総動員して、日本に暮らす一人の国民として、ひいては生物としての自分自身の在り方にまで思考が発展した。使用されたのは、A4サイズのカラー印刷の資料が2枚とA5サイズのワークシートが9枚、このワー

1) 長崎県中央看護学校

クシート一枚一枚にはもれなくビジュアルテキストが張り付けられ、意外性のある発問が一つなされた。

北海道の安平町で生産される「おからクッキー」から学ぶ、災害、人生、生物、消費、経済、地域、復興、ひと…筆者は筆者自身の既有的のものとなげ、そのつながった先にあった未知のものに感動した。平気な顔をしていたが、本当は胸が詰まっていた。全国から迎えた、初めて出会った仲間と写真の解釈に苦勞することから始まった90分間の授業。その最後にこんなことと出会うとは想像していなかった。看図アプローチを使うと、目に見える一枚の写真から見えない世界へとつなげるための授業を創ることができるのだ。

つながる つなぐ つなげる

看図アプローチ研究会は2019年8月まで2年間で10回開催した。看図アプローチによる授業案の作成や授業づくりの理論学習や実践報告などをテーマに実施し、全ての看護学の実践を検討し、理論的根拠も明確にしながら研究会を進めてきた。教員全員が参加する看図アプローチ研究会はなぜ継続できてきたのか。その要因は3つある。

1つ目は興味あるテーマの設定である。新たな発見がある看図アプローチの授業で驚きの体験ができるテーマを設定し、学ぶ楽しさを教員自身が感じることでモチベーションを維持させている。写真1は、研究会のスーパーバイザーである山下雅佳先生の看図アプローチによる授業を教員が実際に受け、驚き、拍手をし、万歳をってしまった様子である。教員自身が授業を体験し、気づきを得ることで看図アプローチの可能性を理解する。



写真1 看図アプローチ研究会の様子①

2つ目は教員間で授業の良し悪しを評価しないことである。この看図アプローチ研究会は、PDCAサイクルに基づいた授業づくりと密接に関連した活動である(図1)。授業案の作成から実践とその記録、授業効果の検証と授業案の改善のすべてをテーマとして扱っている。授業案が提出されても授業案のつくり方や形式の良し悪しをテーマにはしない。授業効果の検証のために授業記録を分析する際も、教師の教え方の評価よりも、どこに学生の学びが成立したか、どこに学びの可能性があるか、教員の省察を中心に、学生の学びの事実から教員同士が学びあうことに焦点を当てている。写真2は、まだ教員歴わずかの教員が実践報告をした後、看図アプローチのビジュアルテキストとしてのイラストと写真の効果について検証している場面である。実践報告をした教員と周囲にいる教員の誰もが笑顔で意見交換をしている。教員の経験年数に関係なく、互恵的な積極的相互交流を実践している。

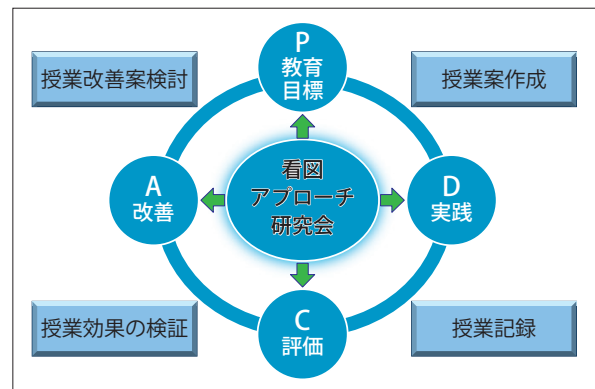


図1 授業のPDCAサイクルと看図アプローチ研究会の関係



写真2 看図アプローチ研究会の様子②

3つ目は、スーパーバイザー、研究者の存在である。教員の創造的思考のために弊害となり得る既存の常識を破る勇気を与えることができる、信頼できるスーパーバイザー。そして盲目的な実践に陥る危険性を回避し、理論ある実践に向けてあたたかく支援してくれる研究者の存在である。

これからも、PDCA サイクルに基づいて、授業を省察的実践のサイクルにしていくこと、他の看護師養成所や様々な学校種の教師のみなさんとのネットワークを築くことによって、人とのつながりを看護教育に活かすことが課題である。また教科と教科外活動をつなぐ、教室と臨地をつなぐ、理論と実践をつなぐ、外来講師と専任教員をつなぐ、医療の多職種とつながる看図アプローチによる授業を開発していきたい。

ともに学びあう関係のその先にあるもの

看図アプローチを導入した効果を明らかにするために、看図アプローチ研究会に参加している7名の教員へ実施した2回（1回目2018年6月、2回目2019年6月実施）の自由回答式質問紙調査の内容を分析した。一つの質問ごとに記載された文章の意味内容のまとめりにデータを分けコード化し、類似した意味内容を持つコードを集めカテゴリー化した。以下、太字はカテゴリーを、〈 〉はコードを表す。

①授業が活性化する

〈わかった瞬間「へえー」と反応がある〉〈実感として理解できたのだなと感じる〉〈一生懸命取り組もうと努力していた〉など、学生が授業に熱心に取り組む、**実感して感動している**反応があると教員は報告している。〈一番学生の反応がよく〉〈生き活きと考える姿〉がみられ、看図アプローチに**好反応で活動的な学習行動**を示し、〈他者の意見を聞き、自分と違う考えから、視点が広がって学んでいる〉〈自分の考えを伝えあい意見を聞きながら学習内容を深めることができていた〉など**協同学習の効果**を發揮している。〈うなずく学生が多い〉〈授業の終わりに「よくわかった」と

わざわざ言いに来た〉という意見からは、**教授内容もよく理解できている**ことが推察できる。看図アプローチにより学生は**能動的な学習行動**を示し、協同学習の効果により学習内容もよく理解すると教員は判断している。学生同士で学びあい授業は活性化している。

②教員は授業づくりを楽しむ

教員は〈学生のみる力をつけたいといけないう意識が強くなった〉〈観察の大切さを実習につなげている〉という**学生のみる力を育てる意識が高まり**、〈教材づくりの工夫が広がり〉〈授業で何か活用できないかいつも考えるようになった〉〈写真をこまめに撮るようになった〉など**熱心に教材をつくる**ようになっている。〈楽しみながら授業ができるようになった〉〈授業をしている方も楽しくなった〉〈自分自身、どのような意見や考えが聞けるか、わくわくする〉と学生の意見や考えを引き出すことによって、教員自身が授業を楽しむことができている。

③学校は同僚性が向上する

〈教員全員で取り組み、教育体制の連携、協力、教材作りの工夫ができるようになった〉〈学校全体で行うことで、学生への教育の充実が図れている〉という意見からは、看図アプローチの導入に**教員全員で取り組む**ことによって、〈お互いの授業のことを以前よりもよく話している〉〈他の教員と話す機会が多くなった〉〈若い先生も自信を持って意見が言えるのがよい〉など**相談しあえる関係づくり**ができ、〈他の人の実践をみて、自分も頑張ろうと思える〉という**相互に影響しあう関係**へと発展することができている。他の専門分野の教材開発に触発されて、自らの教材開発が進んでいる。これは看図アプローチというツールの汎用性の高さが、教員間での情報交換を活性化させ、同僚性を育てているということが考えられる。

佐藤（2012）は、「教師の成長には二つの側面がある。職人としての成長（craftsmanship）と、専門家としての成長（professional development）である。この二つの成長において、校内における教師の学びの共同体（professional learning

community) の構築は重要である。職人としての成長は「技法」と「スタイル」の獲得であり、その方法は「模倣」にある。それに対して専門家としての成長は、「実践と理論の統合」にあり、その方法は「ケースメソッド」(事例研究=授業研究)にある。¹⁾と述べている。看護教員のこの2つの成長を促進する上で、看図アプローチ研究会の存在意義は大きい。今後も、「一人残らず教師たちが相互に学びあう関係²⁾」を維持しながら、学生と共に学びあう教員集団へ向かっていくことが課題である。

やっとバナナがみえてきた

看護専門雑誌の一つである『看護教育』の1996年3月号には「カリキュラム編成の主体は誰か?—そして、そこで問われるもの—」という論文が掲載されていた³⁾(鈴木1996)。その中で大津和子の「一本のバナナから」という、12時間で展開される高等学校社会科の授業を紹介していた。この授業は初めに一本のバナナを食べることから始まる。それから産地のこと、輸入、価格の仕組み、バナナ農園の実態と労働、あるいは農薬使用の現実など様々な内容の授業が展開されていく。大津は、国際理解教育に尽力した人物である。大津の実践を支えていたのは、授業づくりへのこだわり、異文化と出会うことの楽しさに目覚めていたこと、個々の学生への手厚いケア、そして大津自身の類稀なる科学的探究の精神であると言われている⁴⁾。大津の授業は、その裏に的確な調査活動が埋め込まれており、確かな方法論に則った探究の成果であると言われている⁵⁾。年間を通しての授業の目標と計画が明確にされた中に、正当な位置づけとして「一本のバナナから」の授業が成立している。面白いから、発展するからだけではない、明確な目標をもった授業が、教師の周到的教材研究活動のもとに、確かな方法論によって展開されることが重要である。

この「一本のバナナから」の授業を紹介した雑誌が刊行された翌月に、筆者が所属する学校は初

めての入学生を迎えた。これまで、筆者らは「一本のバナナから」のような授業ができるようになるためにはどうすればよいか模索してきた。これから迎える2022年度(看護師2年課程養成所は2023年予定)、看護基礎教育は改正カリキュラムを施行する予定である。指定規則に縛られるだけではなくカリキュラムの自主的編成は学校の、教師の力量が求められることでもある。だからこそ新しい時代のカリキュラムは、様々な人々と一緒につくっていききたい。

学生とともに

説明し理解させようと準備した、思い出の中の黄金色の授業。あの授業は、時々筆者に「授業をがんばれ」と声援を送る。学生をわかったつもりにさせてしまう、わかりやすさの危険性や、わかりにくさや曖昧さが学生を育てるという事実は今までよく経験してきたことだ。理論を実践に応用し、学生の学びの現実から看護基礎教育における協同学習の意義を見出したい。

教師が言葉で説明し理解させるのではなく、学生自身の中に気づきを生む看図アプローチによる授業を、いろいろな仲間と、そして学生とともにつくっていききたい。

引用参考文献

- 1) 佐藤学(2012): 学校を改革する 学びの共同体の構想と実践 岩波ブックレット NO.842 p.38
- 2) 佐藤学(2012): 学校を改革する 学びの共同体の構想と実践 岩波ブックレット NO.842 p.39
- 3) 鈴木正幸(1996): カリキュラム編成の主体は誰か? 看護教育 37/3 医学書院 pp.206-207
- 4) 田中耕治編(2009): 時代を拓いた教師たち II 実践から教育を問い直す 日本標準 pp.72-73
- 5) 田中耕治編(2009): 時代を拓いた教師たち

Ⅱ実践から教育を問い直す 日本標準 pp.72
-73

6) 鹿内信善 (2015): 改訂増補協同学習ツールの
のつくり方いかし方—看図アプローチで育て
る学びの力— ナカニシヤ出版

注 1 本稿の一部は日本協同教育学会
第 16 回大会で発表した。

注 2 本稿に掲載した写真はモザイク
処理不要の承諾を得ています。

2019 年 11 月 8 日受付

2019 年 11 月 10 日受理